

幼児教育「健康」領域に関する専門的事項の
スコープ（範囲）とシーケンス（配列）
—科目「幼児と健康」（仮称）に関連する理論知の整理と再構築をめぐって—

Scope (content) and sequence (arrangement) of specialized subject matters
concerned with the area on 'health' education for infants :
With Reference to the organization and reconstruction of theory and knowledge

榊 原 浩 晃*

Hiroaki SAKAKIBARA *

福岡教育大学 教職教育院* / 保健体育ユニット**

Teacher Education Institute *

Unit of Health and Physical Education **

University of Teacher Education Fukuoka

(令和元年9月27日受付, 令和元年12月12日受理)

Abstract

The present paper examines the content and structure of the undergraduate class, 'Infants and Health' concerning infant education and to create a syllabus for the 15 lesson class. At present, there are many theories concerning infant health. It is necessary to summarize and integrate these theories for teachers responsible for infant education, and reconstruct the theory contents. In the teachers training curriculum for infant education, specialized subjects related to 'health' invariably include information on health issues and exercise guidance, teachers' role for infant play, healthy lifestyle, prevention of injury and safety, etc. To examine each content, it is necessary to collect and examine detailed data and evidence as background materials. The present paper concerns preparatory tasks to be performed prior to these examinations. First, the tasks to be performed are as follows. Proposals were made for structure that allow an overall overview of the course by hierarchically presenting (1) major 'overall goals' (*zentai-mokuhyou*) set throughout the course, (2) content items, and a wide range of so-called general goals (*ippan mokuhyou*) to be categorized, and (3) the goals that students need to attain over the details of each content (*totatsu-mokuhyou*), and the establishment of arrangement of theory and practice to be learned in the course was attempted.

キーワード: 幼児教育 教員養成 教育課程 健康 領域に関する専門的事項
Keywords: early childhood education teacher-training curriculum health
specialized subject matters concerned with the area

1. 緒言

本稿のねらいは、幼児教育「健康」領域に関する専門的事項「幼児と健康」（仮称）の学部授業科目の範囲と配列を吟味し、当該科目を設計するためのシラバス作成の作業を具体化することにある。現状では、幼児の健康をめぐる多くの理論や所説が存在する。それらの内容を総括し、幼児教育を担う保育者に必要な内容に整理・統合して、当該科目の内容を再構築する必要がある。幼児教育を担う教員養成のカリキュラムの中で、「健康」に関する専門的事項には、健康問題や運動の指導、幼児の遊びをめぐる保育者の役割、健康的な生活習慣、安全な生活とリスクマネジメントなどの内容が必ず含まれる。それぞれの内容を精査するには、細部のデータや根拠資料としてのエビデンスの収集とその検討が必要であることはいうまでもない。しかしながら、それらの検討以前に先行して行うべき事前準備の作業が必要であり、本稿の内容はそれを成している。まず、第一に行うべき作業は以下の事柄である。科目の全体像を鳥瞰できる構成を（1）科目全体を通して掲げる「全体目標」、（2）内容項目ごとに立案され、分類される幅広い「一般目標」、（3）各内容の細部をめぐる学生が身につける「到達目標」の順に階層化して提示し、「健康」領域をめぐる理論状況の学的背景と基盤の上に内容と範囲及びそれらの配列を試案して科目設計しようとする。

領域に関する専門的事項「幼児と健康」（仮称）は、健康の指導法と共に新たに幼稚園教員養成の教育課程編成に位置づけられ、そのシラバス作成も求められる。領域に関する専門的事項は、幼児教育の担い手を養成する観点から幼児教育の専門的・学術的立ち位置を有し、実務経験を有する教員が教育と研究に従事することが望まれる。そのためには、改正された『幼稚園教育要領』¹⁾に示された内容をふまえ、養成段階で学生が学修すべき内容を精選して授業設計し直す必要がある。これには、検討のための時間を要する。「健康」領域に関する専門的事項には幼児の運動や運動遊びの内容とその指導が必要事項であり、文部科学省は先に平成24年に『幼児期運動指針』²⁾を策定公表している。表1は、『幼稚園教育要領』にみる「健康」領域として、〔内容〕と〔内容の取扱い〕を示したものである。また、表2は、『幼児期運動指針』にみる運動及び運動遊びの内容を整理したものである。これらをふまえた上で、科目設計がなされるのはいうまでもない。

2. 「健康」領域に関する専門的事項の科目設計のあり方とシラバス作成への試案

(1) 学的基盤と理論知

「健康」領域に関する学問的基盤及び専門となる健康の領域内容についての研究成果をふまえつつ、受講学生にはその背景、研究の現状と課題の到達点をも示すことが求められよう。そうした科学的知見の総体を本稿では理論知と呼び、それらの包括的内容としての範囲（スコープ）を規定すると共に、それらの範囲を示す各項目とそれらの配列（シーケンス）を吟味しようとしている。理論知は、「健康」領域の学的基盤の範囲とその内容を整理した知識のまとまりと理解される。理論知の内容が列挙されても、それらをどのように取扱い、どのように構成し、実際の授業に臨むかという課題が常につきまとう。内容とそれらが精選された範囲にあたるのがスコープである。スコープをどのような順序で、手順で扱うのかを示したものがシーケンスとなる。このように「健康」に関する専門的事項のスコープとシーケンスを整理してはじめて、シラバスの作成も容易となる。本稿はここまでを示す試論とする。このように、スコープ（範囲）及びシーケンス（配列）は、コンテンツ（内容）、コンピテンシー（学生が身につける能力）とも区別される。

(2) 教職課程コアカリキュラムの援用による「健康」領域に関する専門的事項の科目設計

まず、シラバスを作成（試案）する内容と教職課程コアカリキュラムの全体目標・一般目標・到達目標との整合性を吟味することとする。全体目標・一般目標をコンピテンシー（学生が身につける能力）にとらえ、到達目標をコンテンツ（内容）にとらえた場合、（一社）保育教諭養成課程研究会の提示したモデルカリキュラムでは、「健康に関する専門的事項」の到達目標が10項目あげられている³⁾。内容が10以上にわたるので、7から8回の授業回数では時間不足になる。本稿でも、到達目標10項目として、15回の授業回数を想定したコンテンツ試案作成を試みた。1単位の科目であるとする、講義を含んだ演習形式を想定すれば、実授業時間と授業時間外の学習の時間を含んで実際の学修の時間は妥当であるのか、今後他の領域に関する専門的事項との調整が望まれる。表3は、領域に関する専門的事項「幼児と健康」（仮称）における全体目標、一般目標、到達目標の内容を示したものである⁴⁾。教育課程コアカリキュラムの策定をめぐるのは、全体目標、一般目標、到達目標の階層が策定され、全体目標と一般目標はコンピテンシーを示す文言に

表 1. 『幼稚園教育要領』にみる健康領域の〔内容〕と〔内容の取扱い〕

1 心身の健康に関する領域「健康」

〔健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。〕

1 ねらい

- (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。
- (2) 自分の体を十分動かし、進んで運動しようとする。
- (3) 健康、安全な生活に必要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

〔内 容〕

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。
- (7) 身の周りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

〔内容の取扱い〕

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。特に十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育つようにすること。
- (2) 様々な遊びの中で、幼児が興味関心、能力に応じて全身を使って活動することにより、体を動かす楽しさを味わい、自分の体を大切にしようとする気持ちが育つようにすること。その際、多様な動きを経験する中で、体の動きを調整するようにすること。
- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。
- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気づき、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。
- (5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。
- (6) 安全に関する指導に当たっては、情緒の安定を図り、遊びを通して安全についての構えを身に付け、危険な場所や事物などが分かり、安全についての理解を深めるようにすること。また、交通安全の習慣を身に付けるようにするとともに、避難訓練などを通して、災害などの緊急時に適切な行動がとれるようにすること。

表2.『幼児期運動指針』にみる運動及び運動遊びの内容とその整理

運動指針策定の意義

第1章 幼児期運動指針について

1. 幼児期運動指針とは
2. 幼児期運動指針のポイント
 - なぜ、様々な遊びを取り入れることが必要なのか
 - なぜ、楽しく体を動かす時間の確保が必要なのか
 - なぜ、発達の特性に応じた遊びが重要であるのか

第2章 幼児期における身体活動の課題と運動の意義

1. 幼児期における身体活動の現状と問題点
 - (1) 多様な動きを含む遊びの経験が少なくなっている
 - 活発に体を動かす遊びが減っている
 - 体の操作が未熟な幼児が増えている
 - 自発的な運動の機会が減っている
 - (2) 体を動かして遊ぶ時間や環境が少なくなっている
 - 体を動かす機会が少なくなっている
2. 幼児期における運動の意義
 - (1) 体力・運動能力の基礎を培う！
 - 運動を調整する能力や危険回避の基礎となる能力が向上する
 - 姿勢を維持し体を支える力や運動を続ける能力が向上する
 - 卒園後も活発に運動するようになる
 - (2) 丈夫で健康な体になる！
 - 健康を維持するための生活習慣がつくられる
 - 丈夫でバランスのとれた体になる
 - (3) 意欲的に取り組む心が育まれる！
 - 意欲的な態度や有能感を形成する
 - (4) 協調性やコミュニケーション能力が育つ！
 - 感情をコントロールし、友達と上手に遊べる子になる
 - (5) 認知的能力の発達にも効果がある！
 - 脳の発達を支え、想像力豊かになる

第3章 幼児期における運動の配慮事項と保育者・保護者の方々に向けた提案

1. 幼児期運動指針の推進に当たって
 - (1) 保育者の方に向けた提案
 - 『いろいろな遊びの中で十分に体を動かす』ことができるように
 - 『自発的に体を動かして遊ぶ』ことができるように
 - 『安全に楽しく遊べる環境をつくる』ことができるように
 - 『保護者と連携し、共に育てる』ことができるように
 - 遊びの工夫の事例① — 幼児の動きを生かして—
 - 遊びの工夫の事例② — 遊具（巧技台等）を使って—
 - 遊びの工夫の事例③ — 園庭の遊具を使って—
 - (2) 保護者の方に向けた提案
 - 多様な動きが含まれる遊びを取り入れましょう
 - 楽しく体を動かす時間をつくりましょう
 - 安全に楽しく遊ぶことができる環境をつくりましょう

出典) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針（ガイドブック）毎日、楽しく体を動かすために』、平成24年『幼稚園教育要領解説』、平成30年3月

表3. コアカリキュラム構成原理の援用による領域に関する専門的事項「幼児と健康」（仮称）

全体目標

この科目では、領域に関する専門的事項「健康」の指導に関する、(1) 幼児の心身の発育・発達、(2) 幼児期に必要な運動と運動遊び、(3) 幼児期の諸機能の発達と生活習慣の形成、(4) 安全な生活と病気・怪我の予防などの専門的事項についての知識を身につけ、それらを応用して保育の実際に資する技能と態度を涵養する。

【1】幼児期の健康課題と幼児の心身の発育・発達

一般目標 幼児期の健康課題と健康の発達の意味を理解する。

到達目標 1) 健康の定義と乳幼児期の健康の位置づけについて説明できる。
2) 乳幼児期の心と体、心身の発育・発達などの健康課題を説明できる。

【2】幼児期の身体諸機能の発達と生活習慣の形成

一般目標 幼児期の体の諸機能の発達と生活習慣の形成を理解する。

到達目標 1) 乳幼児の体の諸機能の発達の特徴を説明できる。
2) 乳幼児の基本的な生活習慣の形成とその意義を説明できる。

【3】幼児期に必要な運動と運動遊び

一般目標 幼児期の運動技能（スキル）の上達とその意義を理解する。

到達目標 1) 乳幼児期の運動技能（スキル）の上達・動きの習得を説明できる。
2) 幼児期において多様な動きを習得することの意義を説明できる。
3) 日常生活における幼児の動きの経験やその配慮事項等、運動とそれらを取りまく環境のあり方を説明できる。

【4】幼児の日常世界としての遊びと安全な生活及びリスクマネジメント

一般目標 幼児期にとっての安全な生活とリスクマネジメントについて理解する。

到達目標 1) 幼児の遊びと日常世界の特徴について説明できる。
2) 幼児期の安全な生活とリスクマネジメントについて説明できる。
3) 危険に関するリスクとハザードの相違や安全管理について説明できる。

参考）一般社団法人保育教諭養成課程研究会、幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託 幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究：平成 28 年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究——幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える——、平成 29 年

なり、到達目標はコンテンツを示すものと解釈されるという⁵⁾。表3にみる「健康」領域に関する専門的事項は、全体目標を受けて、4つの一般目標が想定されている。この順序は、【1】幼児期の健康課題と幼児の心身の発育・発達【2】幼児期の身体諸機能の発達と生活習慣の形成【3】幼児期に必要な運動と運動遊び【4】幼児の日常世界としての遊びと安全な生活及びリスクマネジメントであり、それぞれに到達目標が合計して10項目あげられている。幼児の心身と健康に関する課題意識を醸し出し、次に身体の諸機能と発達上の特徴や保育者への留意事項を取り上げ、実践を含んだ運動と運動遊びの理論と実践を取り上げる。最終的には、病気・怪我の予防を含んだ安全教育とリスクマネジメントの内容となる。この10項目がモデルカリキュラムとして、養成の質保証を担保するものである。授業回数分として、10項目分とプラス5回で授業回数15回となるが、プラス5回分は大学の裁量と担当教員の教育・研究力量のうち、重点的に幼稚園教員養成課程受講学生に教授したい内容であり、担当教員のオリジナリティともいえる⁶⁾。それらは、研究領域の中核をなす運動と運動遊びの理論と実践にかかわる内容と、幼児の体力構成要素のうち、幼児期に備えるべき調整力に関する学的根拠に関する内容が示されている。これらを受けて、スコープとシークエンスを整理し、授業回数分のコンテンツ（内容）を列挙したものが表4である。

表4. 「幼児と健康」（仮称）のシラバスのコンテンツ試案

1	健康の概念と乳幼児期における健康の重要性
2	幼児の健康課題—心と体の関係
3	乳幼児期の心身の発達
4	幼児の体の諸機能の発達
5	乳幼児期の基本的な生活習慣の形成
6	乳幼児期の食事、排泄、清潔な習慣
7	幼児の体力と運動スキルの獲得
8	幼児期に多様な動きを獲得する意義
9	幼児に必要な調整力と巧みさ
10	運動と情緒、運動と認知能力とのかかわり
11	幼児の身体や健康への興味関心と自己肯定感
12	幼児期の運動と社会的経験、環境とのかかわり
13	幼児期の遊びの日常世界
14	幼児の安全な生活とリスクマネジメント
15	危険に関するリスクとハザードの相違

3. 領域に関する専門的事項にかかる理論知の整理と再構築

(1) スコープとシークエンス①〈幼児期の健康課題と幼児の心身の発育・発達〉

〈健康の概念〉

今日、健康は誰もが健康でありたいと願うものである。しかし、この理念は近代以降に成立し、創られた考え方である。病に対する清潔感が世論の思潮となり、病気や不健康を日常から隠蔽する考え方が過去には一部にあったが、「〈健康〉とは18世紀末につくられた概念である」⁷⁾という指摘もある。こうして、健康は、近代以降に公のものとなり、公衆衛生（public health）の概念が定立し、集団の健康を意味するようになる。現状では、我々人間にとって、健康と不健康を完全に峻別することなどできないであろう。学校教育における健康教育においても、WHO（世界保健機関）の憲章にみるように、健康は身体的にも精神的にも社会的にも完全な良好な状態であるというのは理念としての健康の定義である⁸⁾。実際には我々は日常的に身体の不調を訴えたり、気分がすぐれなかったり、持病をかかえていたりして完全な健康な状態など一時もないのが現実であろう。幼児にとってもこのことはあてはまる。

一方で、個々人のための健康が考え方として存在していたことを理解する必要もある。未熟で将来への成長の可能性を多分に秘めている幼児の場合も、彼らの個や個性が大切にされなければならない。体育思想の研究に長年携わり、幼稚園長も務めた山本徳郎氏は「社会生活を営む人間にとって勿論集団の中での個のあり方を考えねばならないことは当然である。しかし、これまでの教育ではこの面が強調され過ぎていたとすれば、今考え直さねばならないのは、まず『個』をみつめ、そこから出発して集団のあり方を考え直してみるということではないだろうか」⁹⁾と述べている。個を重視した個人的な次元で健康を捉えるために使用されていた言葉に hygiene がある。これは健康の私的的性格あるいは個人の健康という意味をもつ。語源としてはギリシャ語の「hugierne に由来する清潔、衛生」¹⁰⁾という意味である。health の概念が未成熟であった1900年代以前には、主として欧米であっても hygiene が多用された。学校の中での健康的な生活をめぐって、学校衛生（school hygiene）の内実として個人としての努力目標が語られてきたのである¹¹⁾。幼

児教育に始まる学校での健康的な生活を意味する用語として hygiene に代わって health があてられ、この内容が身体運動、授業としての体育、健康指導や健康的な学校生活への目標として、新たに定義し直したのは、アメリカでは当時コロンビア大学の Thomas. D. Wood による 1900 年刊行の『健康と教育』（*Health and Education*）であった¹²⁾。

health の中には、当然のごとく身体運動、体育が含まれる。また社会的には病気に対する臨床措置としての医学も health の中に包含され、健康の内容は広範囲に及ぶこととなる。幼児教育においても、健康の領域の中に運動や運動遊び、生活習慣、健康管理や安全教育の内容を包含する発想は、現代に通じているのである。我々は英語圏の health の意味内容から敷衍される幼児の健康の内容を理解し、幼稚園教員養成課程の学生が必要事項を各論として学んでいくことを理解しなければならない。このように理論知の再構築が領域に関する専門的事項の検討の出発点となる。

〈人間のからだ〉

次に、人間のからだをどのようにとらえるのかという問題に言及する必要がある。言い換えれば、心（精神）と肉体（身体）の関係をどのように考えるのかということであり、このことは心身関係論という哲学的命題でもある¹³⁾。この場合、日本をはじめとする漢字文化圏では仏教における身心のとらえ方が存在しているので、身心観を「身」「心」というように「身」を先に書く場合もある¹⁴⁾。『幼稚園教育要領』『健康』領域の「内容の取扱い」には「心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ…」¹⁵⁾と記載されている。このフレーズは、まさに身心観を表現している。「近年では、人間の『身体と心はひとつのものである』とする考え方が注目されている」¹⁶⁾と言われており、心と体は一体であり、分離することができないということなのである（これを心身一元論ともいう）。

一方で、身体と精神を区分してとらえる考え方がなされた時代もあった。いわゆる心身二元論の考え方は、ドイツ語圏でかつて「Körperbildung あるいは Körperliche Erziehung」¹⁷⁾、とか、Leibeserziehung という用語があり、後者は英語の physical education に匹敵するが、「Körper の方はフランス語の corps と同様語源はラテン語の corpus で、生命のない物体、時には死体を意味する語であった」¹⁸⁾という。Körper は、英語の body に相当し、物理的に人間の身体を把握する場合に用いられる。人間の身体の一部をその機能やしぐみを主題として研究対象にする場合、科学的な物的対象に Körper はなり得るのであった。

一般に、人間の心と体の両者を含めた身体は英語では形容詞の physical である。physical education の用語は、1819 年にペスタロッチによって主として幼児教育の内容として使用されていたことに注目する必要がある¹⁹⁾。英語で bodily education と表現しない理由がここにある。幼児の成長を見守り、心と体を一体としてとらえ、幼児の保育や教育にかかわる身心観は、心身一元論であることを前提としなければならない。

〈発育・発達〉

人が育つことは、発達あるいは成長と表現される。その場合、発達とは質的变化を伴うものである。その人間が持っている能力の質が変化していくことを発達と表現しているのである。成長は幼児の体重が増加していくように身体が計測によって量的な増加が確認できる現象を成長と表現している。体の器官や部位が成人のように完成していく過程は成熟である。このように、発育とは、育って大きくなることを意味する。一般に、我々は「発育・発達」として括って「子どものからだが徐々に大きくなり、そのはたらきが徐々にとおとなの状態に近づいていくという年齢的な変化」²⁰⁾としてとらえている。

発育によって個々の幼児に個人差が生じる要因には、遺伝的要因、家庭や地域との交流を含んだ生活拠点における環境的要因があるが、文化の違いによる社会的性格や役割遂行の行動などによっても個人差が生じる。環境には自然環境と人為的環境に分けられ、自然環境は、季節周期、気温、湿度、日照時間が発育に影響する。環境としての人間の内部環境の維持（ホメオスタシス）と共に、栄養摂取の状態、運動量と経験、生活リズム、病気と体調などの個人的事情や社会的環境が健康の維持・増進に影響する。このように、発達の意味として、幼児教育の現状で考えられるのは身体や精神が成長し、より進んだ形態や機能を持つようになることを意味する。つまり、発育は身体の大さきの成長を指し、発達は「組織機能の複雑化、高度化であって、機能的な面からみた質的、量的な成長過程を表している」²¹⁾という。

〈幼児の身体発育〉

我々が幼児の身体発育について知ろうとする際、身長、体重、胸囲、頭囲、座高などの体格が指標となる。現在では、厚生労働省の発育曲線が公表されている²²⁾。このように、発育の一般的特性として計測できる体位として、1) 身長・体重、2) 頭囲・胸囲があげられ、体格・体型として、1) 体型指標と 2) 身体

各部位の釣り合いとその変化があげられる。次に、骨格や歯について、骨の成長過程や歯の生育過程は、幼児期にも顕著である。およそ6歳までに乳歯から永久歯へのはえかわりがみられる。幼児の身体の発達として、(1)～(4)を順次説明することが必要となろう。(1)呼吸循環機能として幼児の呼吸数、心拍数、血圧は成人との違いがある。(2)消化、排泄機能は、幼児を取り巻く日常生活における生活習慣の育成にかかわる。(3)体温調節機能は、自律神経の働きである。(4)成長期を迎える幼児の睡眠は、早寝早起きはむしろ、午睡も含めた二層性によって、体調を整え、午後も活動的になるために必要である。身体発達と共に、幼児の精神発達には、知覚、記憶、言語、思考、情緒があげられ、いずれも健康領域と深く関連していることが説明されるべきである²³⁾。

(2) スコープとスークエンス②〈幼児の身体の諸機能の発達と生活習慣の形成〉

〈身体の諸機能〉

体の機能(諸機能)を研究する際、人間の心と体が切り離された身体を問題にする場合がある。科学的知見として、人間の身体に接近するとき、心と体を別ものとしてとらえることが身体の科学化・標準化という点では合理性の一端があり、説得力があった。しかし、人間の能力や体格は、個性に裏付けられ、一人ひとりの生育史が異なる点を考慮すれば、科学的に数値で表現されることがすべてではない。

幼児の身体的諸機能とは、おおよそ以下の内容が含まれる。呼吸循環機能、筋肉・骨形成機能、消化・排泄機能、リンパ・内分泌機能等である。発育の過程をスキヤモンが神経系・リンパ系、一般系、筋・骨系、生殖系に発育曲線で説明したことはよく知られている。幼児の身体は、未熟でありながら将来の可能性を秘めている身体なのである。ことに、神経系は6歳の時点で、大人の8割は成長している。幼児期までの神経系の伸びは著しいのである²⁴⁾。もっとも大人以上の成長の伸びを示しているのが、リンパ系である。幼児期にリンパ系の発育が著しく抵抗力を増していることになる。生殖系としては、第一次性徴を経て、第二次性徴への過渡期に位置する。しかし、第一次性徴を越えて、性徴の分別がはじまるのも幼児期である。幼児の行動や運動に、性役割認知がみられるという研究報告も存在する²⁵⁾。

体格は、身体の規格を意味するが、幼児の場合、頭部、体幹部、四肢の均衡が成人と異なる。皮膚の体表面積も大人より割合として大きくなり、日中の体感温度も高くなる。夏期の日中の運動や運動遊びの際の熱中症に留意しなければならない。

〈幼児の体力〉

体力は英語で physical fitness と表記される。日本語では身体適性を意味するが、訳語の体力は判然と理解できないこともある。体力は、「形態や走る、跳ぶ、投げるといった運動の基礎となる能力だけでなく、精神的な要素もその概念に取り入れ、さらにそれらの要素を身体的精神的ストレスに対して生命を維持していく防衛体力(抵抗力)と積極的に生活をしていく行動体力に分ける考え方が一般的である」²⁶⁾と理解される。このように、体力の構成要素は、行動体力と防衛体力に二分された後、それぞれ細部が規定されている²⁷⁾。幼児の体力の現状と発達への将来予測をあらかじめ把握しておくことが保育者に求められるが、幼児の体力の客観的指標として、幼児運動能力研究会(MKS)が幼児の体力測定と評価法を策定している²⁸⁾。幼児の走能力、投能力、捕球能力、静的な姿勢保持能力が示されている。これらの体力の現状は先行して調査研究されたデータによって提示されるが、それらの調査結果から既に先哲が指摘しているように、幼児の体力の程度が著しく低下しているという点で一致をみている。なぜ、幼児の体力が低下しているのか、こうした現状に対するサーベイを根拠づけるデータは個々の調査研究の解釈に委ねられているといってよい。しかし、どの研究者の指摘も共通しているのは、幼児の人口そのものの減少による少子化の影響、幼児の運動遊びの従事時間の低下傾向をあげている²⁹⁾。それに加えて、家庭での幼児の時間・空間の矮小化があげられる。

〈基本的な生活習慣〉

基本的な生活習慣には、「就寝、起床、食事、睡眠、排泄、着衣、清潔(洗顔・歯磨き・手洗い・うがい・爪切り・入浴など)」³⁰⁾の流れがあげられる。『幼稚園教育要領』には、「身の周りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする」³¹⁾ことが求められている。自分でどのようにしようか気づき、行動できるようにしなければならないが、「幼児自身が、次第に生活に必要な行動について見通しをもち、自立的に行動できるようになっていく」³²⁾ことが大切である。まずは、時間を守ること、時間の感覚としては、幼児では時計を見て大人のように行動することは、最初は難しい。朝、保育者や仲間の幼児と挨拶をかわし、はじめの保育時間に入って行動する際に、それらの準備と心構えが必要であることを伝え

るとよい。その日の保育が始まってから最初の休憩時間には、手を洗うことが必要である。そしてうがいをすることである。ハンカチやタオルなどが身近に用意されていなければならない。休憩時間は、気持ちを入れ替える時間である。お水やお茶を飲んだりする際に、コップやふきんが必要である。こぼれたら、そのままに放置せず、ふきんで拭くことも自分でやってみるように仕向けるべきである。休憩時間は、トイレに行き、排泄後の後始末と、お尻を紙で拭くことを園でも家庭と同じようにできるようにしなければならない。昼になると食事の時間を迎える。給食か、弁当かは別として、一人で食べずに、保育者や他の園児と食事を楽しむことができるかどうかを見守る必要がある。保育者や仲間といっしょに食事することで、食事のはじまりと終わりの時間の見通しをもつことができる。どのくらいの時間を食事にかけるのか、保育者は指示する必要がある。食が遅い幼児をけっして焦らせるのではなく、食事時間を見守りながら、次の時間の準備や後始末が必要であることを意識化させるのである。特に昼は、歯磨きや身の回りの整頓、清掃を保育者や他の幼児と取り組むことになる。生活リズムを整えるために、短時間の午睡時間を設ける園も存在する。夜の睡眠は、幼児の発育・発達にとって、重要な生活習慣である。幼児の睡眠時には、「成長ホルモンは、深い眠りの中で、真夜中の午前0時頃にまとまって分泌される」³³⁾という。

こうした園での取り組みも、家庭とリンクさせ、同様に習慣化していくことが望ましい。家庭での親の生活習慣の見直しとそれらを幼児に合致させることも必要である。このように園での生活と家庭とは別物ではけっしてない。

〈食事・排泄・清潔な習慣〉

食事を取ること、摂食行動はまず、丈夫な歯があって噛むことを必要とする。よく噛んで食べることはもちろん、口腔内での舌や歯の動かし方を意識させるとよい。プリンやアイスクリームなどの食材は、舌で押しつぶしたり、飲み込んだりすることになる。乳児の手づかみからフォークやスプーンを活用することを覚えさせる。食べ物をフォークで刺したり、すくったりする動作も日常生活から身につけていく。難しいのは、箸の持ち方であろう。

食習慣の形成は、食べるだけにとどまらない。自分で育てた野菜や稲を収穫して、それを調理して食べるといった「食」への知的好奇心を育みたい。

昼の午睡は、午前の調子を整える意味がある。午後も、午前の時間と同様に、進んで行動したり、降園時間の見通しをもったりすることを体感させる必要があろう。排泄の自立は、基本的な生活習慣の中でも、必須事項である。幼児期には一人で排尿や排便ができるようにしなければならないが、「排尿より排便のしつけを先にはじめた方がトラブルが少ない」³⁴⁾ということもある。その場合、排泄後の後始末や手を洗うことを意識させると、大便自体の嫌悪感が増幅されることにもなる。大便は、汚物、汚いものと幼児に感じとられてしまう。けっしてそうではなく、いわゆるウンチは、うれしいもの、ちゃんと出れば、賞賛できることであり、一人での排便へと自立させるようにする。ウンチはしっかり出ればすがすがしいことであり、嬉しいことなのである。園での排泄は、子どもに自信をつけさせ、自立心を育むプロセスであり、家庭でも同様に、幼児の排泄を見守ることが必要である。家庭との協力的な関係構築が望まれる。

清潔な習慣を育むことが健康の根幹でもある。幼児自身が生活習慣を身につける事項として、手を洗う、顔を洗う、せっけんが使用できる、入浴する、身体を洗う、歯磨きをする、口をゆすぐ、うがいをする、鼻をかむなどの行動が自立してできるようにしなければならない。

(3) スコープとシークエンス③ 〈幼児期に必要な運動スキルの上達と運動遊び〉

〈運動の概念〉

運動を運動学的に分類して説明することができるのは、ドイツ語圏の運動学（Bewegungslehre）の貢献である。その場合、人間や幼児の動きを肉眼で追うことが可能である。可視化された動きということになる。動きが速かったり、ほんの一瞬であった場合、肉眼でついていけない場合は撮影された画像や動画で再現することもできる。動きのある人間、この場合は、幼児の動きを観察する際の現象としての運動となるが、それはBewegungである。我々は幼児の動きをつぶさに観察し、どこにいるのか、どのくらいの動きの速度で動いているのか、どのような動き（複雑な動き）を伴っているのかについて観察することができる。日常的な保育においては、幼児自らが意欲的に、意図的に、興味をもって行う運動や運動遊びに熱心に取り組んでいる場面がみられるであろう。保育者が幼児の心的変化や心の中を探り、幼児の精神的身体的諸過程として運動や運動遊びに従事している時の運動は、Motorikと表現される。BewegungとMotorikの相違はドイツ語での表記の違いで説明が容易となるが、英語ではmovementの用語しかみあたらない。

さらに幼児が同じ動きを繰り返すことがある。身体を何回も回転させていたり、手をあげたり下ろしたりする動作をしたり、軽いジョギングで足踏みしていたりする運動は練習として回数を重ねている運動である。この場合の運動は、ドイツ語では Übung と表記される。英語では practice となる。

日本語では運動という単一の用語で統一されても、運動の意味内容は「Bewegung……時空間における身体の位置変化。可視的な現象。Motorik……Begegnung を現象させるために働く精神的身体的機能の諸過程。現象として直接観察することはできない。Übung……同一の Bewegung を反復練習すること。また、その練習過程の客観的形式」³⁵⁾ の3つに分けられる。

〈幼児にとっての運動の意義〉

次に、幼児にとって身体を媒介させて行う運動はどのような哲学的な意味を有するのか、このことが幼児の運動の意味を深く考えることにつながる。運動の哲学を敷衍して考察すれば (1) ～ (4) に分けられる。それらは、「(1) 道具の意味、(2) 探索の意味、(3) 表現の意味、(4) 自己形成的意味の4つ」³⁶⁾ である。

(1) 道具の意味は、脚を怪我していたり、調子が悪く動けないときに、幼児が日常的な動作に取り組もうと思っても、それが不可能なときの感慨である。人間の動きは移動手段としての道具の意味を持っているということである。つまり、運動は日常的な生活動作をするのに、必要な道具となっているということである。しかし、当たり前のことであるので、幼児は気づいていない。運動することは、日常生活の基盤になっているということである。(2) 探索の意味は、運動によって、自己の身体の調子や健康状態を知覚しようと探ることを指している。今朝の散歩はさすがにささを感じるとか、園での運動遊びは、何がしたいのか、今までしたことのない遊びを見つけられるとか、幼児には幼児の期待があって、運動に取り組んでいるはずであろう。運動遊びをしてみて、体調がいいとか、わくわくするとか、その日の特徴に気づくときがある。このようなとき、運動に対する探索の意味に気づいているという表現がなされる。身体の保持が難しかったり、転んでしまったりする遊び場の様相が体感できるようになると空間を意識して、危険か、安全かを体感で感じることもできる。つまり、自己の身体の状態に気づくことができるのである。その他、運動によって、幼児個人の社会的経験が増していくということが考えられる。他の幼児と比べて、自己の優越感や気の合う他の幼児と仲良く遊ぶことができ、いっしょに遊んでいることで安心感を共有できることもある。年長児ともなると、自己への自信へとつながり、園での日常に自己の居場所や立ち位置を感じられるようになる。次は、(3) 運動の表現の意味である。何かを真似て運動したり、保育者にダンスを教わりダンスの動きを覚えたり、ホップしたりする運動へ発展させて自己の楽しさを表現して飛び跳ねたり、より複雑な動きの流れで心境を身体で表現したりすることもできるようになる。その際、表現的運動は、さらに二分される。1点目が素直に表現するということである。現在の気持ちが素直な動きで表現されるということである。これを運動学では「表出運動 (Ausdrucksbewegung)」³⁷⁾ という。もう1つがわざと○○ (なにになに) のように表現するというような例である。ぞうさんの動きを真似してみなさいというような場合である。こうした模倣の動作の意味であれば、再現が可能な「再現運動 (Darstellungsbewegung)」³⁸⁾ と呼ばれる。最後は、(4) 運動の自己形成的な意味である。幼児の年齢段階では、この意義に気づく幼児はいない。しかし、後の時代になって、学齢期や成人になったときに回顧して、自己にとっての幼児期の運動の取り組みが現在の自己を形成しているということが理解できるようになった際の運動の意義をいう。幼児期の当該の運動がなかったら、現在の自己形成になっていないとして、最も自己形成的意味を持つものである。成人として、幼い頃あるいは学齢期の頃に取り組んだ特定の運動やスポーツが成人への自己形成に寄与したということを経験することになるとうき、運動には自己形成的な意味があったと解釈される。

〈運動技能 (スキル)〉

乳幼児から幼児に至る動作や運動の獲得過程には、運動技能 (スキル) の上達過程が深く関連している。人間は、他の動物に比べて生理的には早産であることが知られている。人間は誕生後二足歩行できるようになるにはおよそ1年を要する。誕生後に原始的な動作は反射から生まれる。これらのいくつかの原始的な反射も後の諸動作獲得につながっている。年齢を経るにつれ、乳幼児は多様な動作を身につけていく。その足どりは学習でなく、むしろ動作の系統とそれらの動作の複雑さ、つまり単純な動作から複合的な動作の協応的な関係によってなされている。

無意識な反射から対象物を視認することを経て、立ち上がり、ころがり、歩き、走るといった動きの日常世界を幼児自らが開拓しているのである。運動の巧みさには、人間の脳の中樞神経のうち小脳が関与する。運動神経として大脳からの末端の運動器 (筋) への神経回路は小脳がまず介在する。朝比奈によれば、「筋

の収縮を起こす大脳からの信号、神経衝撃は二つの経路を通ってくる。1つは錐体路系であり、今一つは錐体外路系である。一口にいえば、錐体路系は意識的意志的運動を受け持つのに対し、錐体外路系は反射的あるいは調整的あるいは協応的な運動を考えられる³⁹⁾という。運動神経としての指令は、運動の未熟な段階では錐体路による神経伝達によるところが大きい。その際の運動は、最初はゆっくりとぎこちない動きを伴う。すなわち、人間の意識として意図的になされる運動は、やがて、無意識で巧みなスムーズな動きへと継承されていくのである。この段階で、運動神経は錐体外路系に移行している。つまり無意識にうまく運動が成就している。

幼児教育の運動のスキル指導の実際には、特に発育・発達の関係で最も重要な事項がある。神経系の発育と動きの獲得時期が幼児期から学齢期（低学年）にあたるからである。この時期に適切に運動学習が行われなければ将来の一人前の人間としての運動神経の発達にも大きく影響するということである。運動遊びで種々の運動や動作と関連づけて、幼児に経験されるプログラムが是非とも必要なのである。運動や動きには、種々のスキル獲得が関連している。それらをうまく組み合わせ、その行為が運動遊びとして、保育者に指導されていくことになる。幼児に必要な運動にかかわってコントロールする能力を近年、調整力と呼ぶことがある。これは、幼児期の「様々な動きにつながるバランス・スピード・敏捷性・協応性などの神経機能による調整力や柔軟性を含めた運動コントロール能力⁴⁰⁾」と説明される。1980年代にドイツ語圏の運動能力評価指標として脚光を浴び、調整力概念が共通認識されるようになったのは、ドイツのKlaus Rothの研究成果に依拠している⁴¹⁾。ここでは、乳幼児から幼年期への動きの獲得と運動の複合的なしくみのプロセスを平易にみてみようとする。

〈幼児期における多様な動きの獲得〉

幼児はどのようにして運動の動作を獲得していくのか。大人と比較して幼児の新しい空間環境や社会関係に影響を受けながら、幼児は自らの世界を広げようとする。動きの獲得は、『『自発的分化』、『模倣による獲得』、『表象にもとづく獲得』の3つの方法⁴²⁾』があげられるという。1歳未満の乳児の動きは、座ったままの状態の手によって対象物に触れることから始まる。手による対象物への接触に慣れた幼児は、手と同様に脚での接触を試みる。こうして手足の協応関係が成り立っていくのである。対象物を強く叩いたり、逆に自己の身体から放り出したりする。実は、対象物への接触と手による放り出しの動きは、後に投動作へと継承されていく。頭上から両手を使ってビニールのボールなどを投げる動作である。投げる対象物が片手でつかめるくらいの大きさのボールであると、腕の動作と共にどこかの空間時点でボールを手放すことになる。片手で投げる場合には、利き側との関連も生じてくる。右手で投げるか、左手で投げるかは、大脳の運動野の左右どちらから指令を発しているかによるが、神経交叉しているので、右利きは左脳、左利きは右脳から発出していることになる。しかし、幼児が投げる目標を意識するようになるのは、年長以上の年齢になってからであろう。ボールのような球体を胸の前で両腕でかかえて捕球することは、捕球動作の第一段階である。

首がすわり、体幹が支持できるようになるとは匍匐（這う動作）がみられる。這う動作から立ち上がって短時間の平衡保持へとつながる。脚を動かしながらバランスをとることを乳児は身体で覚えはじまるのである。歩く方向を変えたりすることができるようになると立ち止まって立位を維持するようになる。幼児にとって、歩の動作は動きの発展の足がかりとなる。歩から走への動きは、単に脚の動作が速くなるだけではない。腕の動作も加勢されて、足が地面に接地するタイミングが速くても次のステップがとれるようになる。そして、両足が地面に接地していない空間状態が保持できれば走の動作になっていることになる。この段階が走の動作の獲得である。同じステップをとらずに、接地のタイミングを時間をかけて大きなステップで接地の目標地点を前方にずらすと初歩的な跳躍動作の獲得ととらえることができる。つまり、「子どもの動作は、ある順序性をもって段階的に習得され多様化していく⁴³⁾」のである。跳ぶ動作は、両脚でその場で飛び上がる動作もできるようになるが、幼児の動作獲得の過程としては、走動作からの分化である。両足跳びは、片足跳びへのつながり、ホップ、ステップ、ジャンプへの多様な動きへと継承される。やがて、走動作から飛び越える動作になったりする。このように幼児が自発的に動きを分化させていくのである。このように幼児の基本的な動きは、多様な運動遊びによって試行錯誤しながらスキルとして身につけられていく。そして、それらは、小学校低学年の運動遊びへと継承される。表5は、幼児期の基本的な動き、多様な動きと運動遊びが、小学校低学年時の「多様な動きをつくる運動遊び」に継承される内容を左から右へと横断的にみたものである。

表5. 幼児期運動指針に示されている動きの内容と運動遊び及びその後の幼少接続との関連

基本的な動き	多様な動きと運動遊びの例示	「多様な動きをつくる運動遊び」
「体のバランスをとる動き」 立つ 座る 寝ころぶ 起きる 回る 転がる 渡る ぶら下がる	3歳から5歳ごろ ・傾斜をつけて斜面歩き ・遠くへとぶ(なわ・テープを用いる) ・転がる ・バランスをとって横歩き ・登ったり下りたり 動物わたり(ヘビ・ナマケモノ) ・四つ足で歩く 両足で(上向き・下向き)	体のバランスをとる運動遊び ・回るなどの動きで構成される運動遊び ・寝転ぶ、起きるなどの動きで構成される運動遊び ・座る、立つなどの動きで構成される運動遊び ・体のバランスを保つ動きで構成される運動遊び 体を移動する運動遊び ・這う、歩く、走るなどの動きで構成される運動遊び ・跳ぶ、はねるなどの動きで構成される運動遊び ・一定の速さでのかけ足 用具を操作する運動遊び ・用具をつかむ、持つ、降ろす、回す、転がすなどの動きで構成される運動遊び ・用具をくぐるなどの動きで構成される運動遊び ・用具を運ぶなどの動きで構成される運動遊び ・用具を投げる、捕るなどの動きで構成される運動遊び 力試しの運動遊び ・人を押す、引く動きや力比べをするなどの動きで構成される運動遊び ・人を運ぶ、支えるなどの動きで構成される運動遊び
「体を移動する動き」 歩く 走る はねる 跳ぶ 登る 下りる 這う よける すべる	4歳から5歳ごろ(ボール遊びの例示) ・(ボールを)頭の上に乗せて ・上に投げてキャッチ ・いろいろな形でキャッチする ・弾ませてキャッチ ・バツと手を放してみる ・ついたボールを蹴る ・転がしたボールを蹴る ・自由に蹴る ・ゴールに向けて蹴る	
「用具などを操作する動き」 持つ 運ぶ 投げる 捕る 転がす 蹴る 積む こぐ 掘る 押す 引く	5歳から6歳ごろ (複雑な動きが含まれる運動遊びの例示) ・手つなぎ鬼 ・ボール回し鬼(ボールを持っている人をタッチ) ・バイナツブルじゃんけん ・図形鬼(鬼は入れないよ)いろいろな図形で ・フルーツバスケット(いちご！) ・影踏み ・オオカミさん今何時？ (夜中の12時！逃げろ)	

出典) 文部科学省『幼児期運動指針』平成24年、及び文部科学省『小学校学習指導要領解説(平成29年告示)体育編』平成30年

乳児は、寝転んでいる姿勢から背中を反らし、エビのように身体を反り返り、体幹の向きを変えることができるようになる。これを寝返りという。体幹だけでも空間を移動することが可能となる。体幹を軸に回転させる動きは、でんぐり返しの動きであるが、身体の高軸の観点となる。前方に回転することができれば、低学年のマット運動の前転の運動につながる。

身体的位置関係を水平に変化させたり、逆立ちするような動きは、幼児の段階でも可能である。神経系の三半規管の働きによって、身体の平衡感覚が芽生えているわけである。走って対象物を乗り越えたり、よじ登ったり、対象物を押したりする動き、身体を回転させたりする動き、それらも動きの分化から出現しているのである。

次に、他者の動きをまねる動作は、幼児の最も得意とするところであろう。身近にいる人の動きを真似するようになるが、真似る対象を動きで再現したり、言葉を介在させて運動することができるようになる。自己に備わっている知覚を幼児は利用しているのである。大人を真似る対象とするが、まったく同一の動きになるとは限らない。そして、幼児の感受性で自らの動きを再構成しているのである。

さらに発展した動きは、幼児がどのように運動するのか見通しをもっており、意識的に新しい動きを獲得することにつながっている場合である。不十分な運動形態であっても、この過程で新しい動きを学んでいるのである。園庭での鬼ごっこは、鬼になって他の幼児を追いかける動きと鬼から逃げようとする動きとは異なる。この両方を意識してやり遂げているのである。

このように、「幼児期の動作習得のほとんどは、多彩な運動遊びを通して成立する。子どもは運動遊びの中で自分の知恵を働かせ、仲間と心を通わせる」⁴⁴⁾のである。

(4) スコープとシークエンス④〈幼児にとっての遊びの日常世界と安全な生活・リスクマネジメント〉 〈遊びの概念〉

遊びのとらえ方は幼児の遊びを現象として、第三者的に観察する限りにおいて、肉眼で観察できる現象をいかに客観的に把握するかという点に求められよう。いわば、幼児の遊びを観察しようとする観察眼である。そのためには、かつて遊びを哲学的あるいは文化論的に論じた2つの大著ヨハン・ホイジンガ（Johan Huizinga）の『ホモ・ルーデンス』⁴⁵⁾（*Homo Ludens*）とロジェ・カイヨワ（Roger Caillois）の『遊びと人間』⁴⁶⁾（*Les jeux et les hommes*）の所説を引き合いに出しながら、幼児の遊びの概念にせまりたい。

遊びのすぐれた理論研究として、ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』（1938年）という遊びについての画期的な書物を著し、カイヨワがそれを批判的に継承して『遊びと人間』（1958年）という書物の中で、遊びの理論を深めていったことはよく知られている。

ホイジンガの理論は、従来子どものすることとして、まともに取り上げられなかった遊びを「人間の文化は、遊びにおいて遊びとして成立し、発展した」というテーゼに集約されるような、いわば文化の中心に位置づけたことを特徴としている。ホイジンガが独創的なのは、「遊び」をカテゴリー（範疇）として把握した方法論に求められる。ホイジンガが「カテゴリーとしての遊び」という表現をしているのは、それをさまざまな文化事象を分析する装置として設定しているということの表明なのである。佐藤によれば、「この定義は、遊びの『自由性あるいは自発性』『時間・空間的制限性』『規則性』『虚構性』『自己目的性（没利害性）』などを要素とするものである」⁴⁷⁾という。それらは幼児の遊びにもあてはまる。幼児の遊びも意味空間を持っているからこそ、後に述べるような幼児の遊びの日常世界として理論構築が可能になるのである。

遊びの意味空間と共に、具体的な活動の把握の仕方を問題にすると、以下のようなカイヨワの遊び理論が援用される。

「よく知られている『アゴン（競技的、競争的な遊び）』『アレア（運、偶然の遊び）』『ミミクリ（ものまね、変装による遊び）』『イリンクス（眩暈あるいは知覚の不安定化による遊び）』という分類は、なるほど、カイヨワによって『基本的なカテゴリー』と呼ばれてはいる。しかし、この場合の「カテゴリー」は先にみたギリシャ語語源による本来の意味、すなわち分析・分類のための視点・視座という機能的な意味ではなく分類の結果何らかの共通的特質をもった実体の集合（class）」という近代的な意味でのそれなのである。つまり、『アゴン』『アレア』『ミミクリ』『イリンクス』は、それぞれが個々の特徴的な活動形態の類概念として機能している『遊び』なのであって、カイヨワ自身による『遊び』の分類表をみれば、そのことは直ちに了解されるだろう。」⁴⁸⁾

カイヨワの「遊び」は、いうまでもなく、それぞれ具体的な活動形態の遊びである。幼児の遊びを具体的な活動形態でみると、同じく4つのカテゴリーが用意されている。かけっこやチャンバラなど、相手との競争の要素をもった遊びを「アゴン」というカテゴリーに位置づける。じゃんけんやかた取りなど運や偶然の要素の遊びは「アレア」のカテゴリーに入る。現象として、目のまわるような動きをつくったり、シーソーに乗ったり、ブランコなどの遊びは、眩暈とって「イリンクス」に分類される。さらに、幼児の遊びの中でしばしば観察されるのは、「ミミクリ」の分類の遊びで、ものまねや人形劇、〇〇（なににな）ごっこといわれるような遊びである。カイヨワのカテゴリーは、幼児のみならず誰にでも適用可能で、遊びの具体的な活動形態を分類することに役立っている。

〈幼児の遊びの日常世界〉

幼児の遊びの日常世界とは、広義には、幼児の遊びを生成する基盤としての幼児の〈内的宇宙〉、その表現形態としての幼児自身の遊び、これら表現する主体である幼児存在とその背景としての幼児の遊びの環境の3つを内包する幼児独自の世界を意味している。狭義には、幼児の遊び世界を組織し、〈幼児自身の遊

び)を生成する基盤となる環境世界に対する幼児独自の意味づけの仕方である⁴⁹⁾。外山ほかは、「自分の性格や能力、身体的特徴などに関する、比較的永続的な自分について考えることを自己概念といいます。自己概念は、人の行動や認知に大きな影響を及ぼします。幼児期の自己概念は客観的とはいえず、非現実的な点も多々あります。しかしながら、それによって、むしろさまざまな側面での発達が支えられるとの指摘もあります。」⁵⁰⁾と述べている。幼児は大人と違って、未熟ながらも自己の環境を認識し、理解しており、そのことが将来にとって意味あることなのである。

幼児の内的宇宙とは、幼児の社会的存在が保証され、幼児の身体や認識の発達は発達の特性に規定された感覚思考を基にした幼児自身の遊びを生起させる幼児の心の世界をいう。幼児自身の遊びとは、未組織な遊び及び幼児が意味づけした未組織的遊びや組織的遊びをいうのである。それらは、〈幼児－保育者〉の視点からの幼児育成の遊び(幼稚園の中での遊びの場合や園外で大人が指導したり見守ったりする遊び)と幼児自身の遊び世界に分けられる。

「ある幼児がブロック遊びをしている。保育者が「何をつくっているの?」と聞くと、幼児は、ヒコーキ(飛行機)と答える。幼児は経験的に飛行機という言葉を知っている。大人の目から見れば、飛行機はどのような飛び方をするのかとか、地上からどのように大空に上がっていくのか、という固定観念が既に出来上がっている。しかし、幼児自身の遊びからみると、幼児は実に多彩な意味づけをしているといえる。飛行機は大空を飛ぶ乗り物であるが、幼児の世界では、上下に飛んだり、急に方向を変えたり、幼児独自の世界の中の乗り物なのである。また、幼児が、その飛行機に乗って操縦しているかのごとく、幼児の遊びのコスモロジーの形成をみるのである。実に想像力豊かなものである。」⁵¹⁾

保育者は、幼児の遊びの日常世界の中に入っていくことができようか?飛行機は滑走路から徐々に上昇するなどの既成の事実を教える必要はあえてなかろう。幼児の遊びをより広く、自由な発想を広げていくことが幼児の成長にとっても資するところ大であろう。つまり、幼児の遊びの日常世界は、保育者(大人)の目で見える世界とは区別されなければならない。両親の手を一時離れて幼稚園に通うことができるようになり、自立心も芽生えてくる幼児を園での保育で見守るとき、大人の目で、幼児の遊びをみる必要はないのである。幼児が考える思考パターンの幼稚さをあえて問題にせず、保育者にも発想の広がりや空想に満ちた不思議な世界を体験して欲しい。幼児の遊びの日常世界から幼児教育の現場を見通してみると、そこには、現代の教育を問い直す契機となる可能性が見え隠れする。

〈安全な生活とリスクマネジメント〉

幼児の遊びの日常世界は、園はもとより、家庭での生活全般にかかわる。保育の最も重要な観点は、園や家庭で、保育者と保護者が一体となって、幼児を守らなくてはならないことである。森田によれば、「幼稚園や保育所内の建物や園具に関係した事故や災害は多種多様である。例えば、遊具での事故、用具での事故、転落、転倒や衝突、誤飲などである。この時期の子供は、危険なあそびを好んでしたがる時期でもあるので、保育者はそれに代わるものを与えたり、あそびを転換させたりして災害を未然に防ぐように配慮することも必要である」⁵²⁾という。危険を予知して、未然に防ぐことをリスクマネジメントという。リスクは、改善に役立て、危険を未然に防ぐことのできる可能性がある状態を意味する。つまり、リスクを察知し、これらにあらかじめ心構えとして備えることができるかどうかである。リスクは、気づかなければならないのであり、気づいて対処することで、安全に行動できるように仕向けることができるのである。近年では、子どもの運動遊びにおける危険予測・回避能力の育成について取り扱った研究もある⁵³⁾。幼児教育の現場で、リスクマネジメントすべき対象は、幼児本人を対象としつつも、本人をめぐる周囲や人的環境までもを包含する。つまり、本人はもとより保護者から由来するリスクや、環境や設備のリスクも存在する。しかし、家庭から園へ、園から家庭への移動中の安全確保も怠らないようにしなければならない。園での安全の確保は、運動中の安全確保、幼児が園内を動く動線を配慮し、安全を確保することが必要である。園内のハザードマップの作成と掲示を経て、あらかじめ想定される危険を予知し、幼児にわかるように伝えることが大切である。

4. まとめにかえて

本稿の根幹は、理論知の内容に即して、幼児教育向けの再構成を試みたものである。理論知の再構築とシラバス作成は、第一に幼児教育の質保証を担保するためのものであるが、幼稚園教員養成課程を有するそれぞれの大学の事情が斟酌されねばならない。授業担当教員の教育・研究力量のうち、重点的に養成課程の受講学生に教授したい内容は別途用意され、担当教員のオリジナリティともいえる内容は具備してかまわないはずである。当該科目のスコープのうち、幼児期に必要な運動と運動遊びは、担当教員の裁量では、重点的なスコープとコンテンツを構成している。その理由は、幼児の運動スキルの獲得過程や幼児期に身につけるべき体力要素のうち、身体を操作し、運動を調整する能力は、特に幼児期に重要であり、その後の発育・発達と成人への能力醸成へと架橋される重要事項であるからである。それらは、研究領域の中核をなす運動と運動遊びの理論と実践にかかわる内容であり、幼児の体力構成要素のうち、幼児期に備えるべき調整力に関する学的根拠に関する内容である。これらの詳細は、別稿を用意する必要がある。

「健康」領域に関する専門的事項の実際の運用には、教職課程コアカリキュラムの「全体目標」「一般目標」「到達目標」の内容を養成課程の受講学生に理解させ、授業実施と単位認定の責任体制が確保されなければならない。また、授業設計及び授業実施には、理論と実践の融合と往還をどのように図っていくかの命題も存在している。実際の授業実施には、運用面で想定される、アクティブ・ラーニングの授業形態の模索やICTの活用も考慮しなければならない。別途、授業設計とシラバス作成が急務となる、指導法の科目：「健康の指導法」には、保育にかかる模擬授業（シミュレーションとリフレクション）が中核的な内容となるであろう。また、「健康」領域に関する専門的事項と「健康の指導法」の科目内容が関連づけられ、科目の連関と内容の整合性も図られなければならない。これらも今後の課題である。

〔付 記〕

本研究は、「2019年度福岡教育大学 教育課程編成に関する研究プロジェクト経費」の支援を得て実施されたものである。

【註及び引用・参考文献】

- 1) 文部科学省『幼稚園教育要領解説（平成30年3月）』, 2018年
- 2) 文部科学省 幼児期運動指針策定委員会『幼児期運動指針（ガイドブック）毎日、楽しく体を動かすために』, 2012年
- 3) 一般社団法人保育教諭養成課程研究会, 幼児期の教育内容等深化・充実調査研究委託 幼稚園教諭の養成の在り方に関する調査研究：平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究－幼稚園教諭の資質能力の視点から養成課程の質保証を考える－, 2017年
- 4) 同上, 平成28年度幼稚園教諭の養成課程のモデルカリキュラムの開発に向けた調査研究, pp.11-12. 同調査研究の内容を参考にさせていただいた。
- 5) 文部科学省, 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（第3回）議事要旨（日時：平成28年12月12日（月曜日）, <http://www.mext.go.jp/menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/1380655.htm>（2019年9月20日閲覧）
- 6) 同上, <http://www.mext.go.jp/menu/shingi/chousa/shotou/126/shiryo/1380655.htm>（2019年9月20日閲覧）
- 7) バーバラ・ドゥーデン：玉野井麻利子訳, 「身体を歴史的に読み解く－〈健康〉という名のイデオロギー批判－」, 『思想』, 736号, 1985年, p.135.
- 8) 横橋五郎他編, 『健康学概論』, 現代保健体育学大系（12）, 大修館書店, 1971年, pp.17-20.
- 9) 山本徳郎, 「『個』の身体性と近代の教育」, 『研究紀要』（奈良女子大学文学部附属幼稚園幼年教育研究会）, 第16巻, 1988年, p.13.
- 10) 「hygiene」Matsuda, M. *et al. English-Japanese Dictionary for the General Reader*, 2nd edit., Kenkyusha, 1999, p.1231.
- 11) 中牟田佳奈・榊原浩晃, 「20世紀初頭のアメリカにおける子どもの生活とThomas D. Woodによる学校衛生・体育論への着想」, 『福岡教育大学紀要』, 第64号, 第5分冊, 2015年, pp.113-122.
- 12) 中牟田佳奈・榊原浩晃, 「Thomas D. Woodのコロンビア大学在職時代の健康（衛生）・体育に関する

- 研究業績（著作）と講演論説からの選集（1932年）」、『体育史研究』, 33号, 2016年, pp.15-30.
- 13) 池田善昭, 『心身関係論』, 光洋書房, 1998年
 - 14) 「身心」, 新村 出編, 『広辞苑』(第6版), 岩波書店, 2008年, p.1452.
 - 15) 前掲, 『幼稚園教育要領解説』, p.157.
 - 16) 林 洋輔, 「身体とところをどのように考えるか」, 征矢英昭・坂入洋右編, 『たくましい心とかしこい体』所収, 大修館書店, 2016年, p. 210.
 - 17) 内山治樹, 「ドイツ語圏における体育概念」, 体育原理専門分科会編, 『体育の概念』, 不味堂出版, 1995年, p.45.
 - 18) 山本徳郎, 「考える人間は墮落した動物である!」か? 「身体」, 「健康」, 「運動」の概念の再考, 『体育学研究』, 42巻, 第6号, 1998年, p.430.
 - 19) Johann Heinrich Pestalozzi, *Letters on Early Education. Addressed to J.P.Greaves, Esq. by Pestalozzi*, 1827, p.89. 一般にこの書は, ペスタロッチの「幼児教育書簡」として知られる。1819年2月10日付けの書簡に, physical education の用語がみられる。幼児に対して physical education の用語が使用された初期の事情を物語る。
 - 20) 高石昌弘, 「発育発達と子どものからだ」, 『子どもと発育発達』, 第1巻, 第1号, 2003年, p.9.
 - 21) 林 正, 『子どもの身体の発育と発達』, ぎょうせい, 1984年, pp.11-12.
 - 22) 厚生労働省, 身体発育調査, <https://www.e-stat.go.jp/statsearch/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450272&tstat=000001024533&cycle=8&tclass1=000001048106> (2019年9月20日閲覧)
 - 23) 前橋 明編, 『乳幼児の健康』(第3版), 大学教育出版, 2018年, pp.17-23.
 - 24) 前掲, 林 正, 『子どもの身体の発育と発達』, ぎょうせい, 1984年, pp.11-12.
 - 25) 森 司朗・飼島裕子, 「幼児の運動遊びの性度認知に関してー幼児の運動遊びの性度認知尺度の試みー」『東京学芸大学紀要』, 第1部門, 51号, 2000年, pp.149-155.
 - 26) 体力づくり国民会議事務局 総務庁青少年対策本部編, 『国民の健康・体力づくりの現況』, 大蔵省印刷局, 1990年, pp.2-3.
 - 27) 同上, pp.2-3.
 - 28) MKS 幼児運動能力検査。この運動能力検査は4, 5, 6歳の幼児を対象とし, 25 m 走, 往復走, 立ち幅跳び, ソフトボール投げ, テニスボール投げ, 両足連続跳び越し, 体支持持続時間, 捕球など6種類の検査で構成されている。 <http://youji-undou.nifs-k.ac.jp/> (2019年9月20日閲覧)
 - 29) 前掲, 『幼児期運動指針』, pp.18-19.
 - 30) 佐野裕子, 「基本的生活習慣の形成」, 前掲, 前橋 明編, 『乳幼児の健康』所収, p.38.
 - 31) 前掲, 『幼児期運動指針』, p.154.
 - 32) 同上, p.153.
 - 33) 佐野裕子, 「基本的生活習慣の形成」, 前掲, 前橋 明編, 『乳幼児の健康』所収, p.49.
 - 34) 同上, p.51.
 - 35) 木村真知子, 「運動の概念」, 『体育原理講義』, 大修館書店, 1987年, p.36.
 - 36) 森田啓之, 「運動のもつ可能性」, 友添秀則・高岡出美則編, 『教養としての体育原理』(新版)所収, p.30.
 - 37) 前掲, 木村真知子, 「運動の概念」, 『体育原理講義』, p.42.
 - 38) 同上, p.42.
 - 39) 朝比奈一男, 『運動とからだ』(第12版), 大修館書店, 1992年, p.107.
 - 40) 白旗和也, 「論説: 幼児期に育成を目指す健康や心と体とは(特集) 健康な心と体」, 『幼児教育じほう』, 45巻5号, 2017年, p.7.
 - 41) Klaus Roth, *Strukturanalyse koordinativer Fähigkeiten, empirische Überprüfung koordinations-theoretischer Konzepte* (Beiträge zur Bewegungsforschung im Sport, Bd. 6), Bad Homburg vor der Höhe, 1982
 - 42) 宮丸凱史, 「幼児の運動と発達」, 『児童研究』, 第81号, 2002年, p.44.
 - 43) 同上, p.47.
 - 44) 同上, p.48.

- 45) ヨハン・ホイジンガ, 里見元一郎訳, 『ホモ・ルーデンス』, ホイジンガ選集 1, 河出書房新社, 1989 年
- 46) ロジェ・カイヨワ, 多田道太郎・塚崎幹夫訳, 『遊びと人間』, 講談社, 1990 年
- 47) 佐藤臣彦, 「遊びとは何か」, 『体育原理講義』, 大修館書店, 1987 年, pp.45-55.
- 48) 同上, pp.50-51.
- 49) 榊原浩晃, 「幼児の遊びのコスモロジー」, 『福岡教育大学幼児教育研究会紀要』, 第 5 号, 福岡教育大学教育学部・附属学校研究部 幼児教育研究部委員会 幼児教育研究会, 1998 年, pp.98-101.
以前の拙稿での上記論文では, 幼児の世界の内的宇宙論として, コスモロジーの言葉を当てていた。本稿では, 遊びの日常世界として再考している。
- 50) 同上, p.100.
- 51) 外山紀子・中島伸子, 『乳幼児は世界をどう理解しているか』, 新曜社, 2013 年, p.218.
- 52) 森田陽子, 「安全管理と安全教育」, 前掲, 前橋 明編, 『乳幼児の健康』所収, p.77.
- 53) 坂下玲子, 「子どもの運動遊びにおける危険予測・回避能力の育成について」, 『熊本大学教育学部紀要』, 第 67 号, 2018 年, pp.163-169.

